

經濟論叢

第六十二卷 第一・二號

古典經濟學に於けるマルサス理論……………岸本誠二郎

標本論の一般化の問題……………青山秀夫

ユスツス・メエゼル (下) ………………出口勇藏

貯蓄投資の關係と時間の問題……………岩根達雄

馬場啓之助著「ジョン・S・ミル」……………行澤健三

ハンセンの財政々策をめぐる諸問題……………木下和夫

京都大學經濟學會

古典經濟學に於けるマルサス理論

岸 本 誠 二 郎

目 次

- 一、マルサスの方法論の特質
- 二、マルサスの價值論の特質
- 三、富の増進論の意義
- 四、マルサスとケインズ

一、マルサスの方法論の特質

英國古典經濟學はアダム・スミスを起點とするが、それはマルサスの流れとリカア드의流れの二潮流として發展した。この發展はスミス以後顯著となつたが、既にスミス經濟學そのものがこの二つの側面を有してゐたのである。マルサスとリカアドはそれをそれぞれを發展せしめた。「この二人の經濟學者は、共に神學者が聖書から出發する如く、アダム・スミスから出發してゐる。」従つてこの二人は等しくスミスの衣鉢を繼ぐ古典經濟學の代表者であるが、又互に對立的立場にあつた。一般にスミス經濟學は實證的であるとともに理論的であつた。實證的なるマルサス經濟學と理論的なるリカアド經濟學はこより發する。しかも兩者はスミスの單純なる反復でなく、時代とともに前進した。スミスは産業革命の黎明期にあつて富の哲理を説いたに對し、マルサスは産業革命

の酷なるとき貧の原因を探究した。スミス經濟學の重點は生産論にあつたに對し、リカアド經濟學は分配論を開拓した。生産されたる富が社會の諸階級の間に如何に分配されるかといふことが、リカアド經濟學の中心問題であつたのである。スミスに於ては全體として神學的形而上學的傾向が強かつたが、マルサス、リカアドに於てはこれは或は實證的に或は理論的に除かれた。しかも三者とも個人主義、自由主義の立場を貫いてゐた。

マルサスの實證主義はかくしてスミスの一面を徹底せしめ、リカアドに對して對蹠的であるが、それは如何なる内容のものであつたか。彼の實證主義の最もよき産物は『人口原理論』である。この研究に於て述べるところによると、正しき理論は實驗によつて確立せらるべきものであるといふことは、學問上既に認められた眞理である。しかし實際問題には如何に達識爛眼の人にも殆ど豫見の出來ないやうな、幾多の衝突や幾多の錯綜せる事情が起つてくるのであるから、未だ經驗の試煉に耐へたことのない理論について、それが正しい理論であると言ひ得る場合は殆どないわけである。故に試煉を経ない理論は、それに對するあらゆる反對論を十分に考慮し、それを明確に矛盾なきやう論駁を盡した上でなければ、それを正しいとすることは勿論、まあ多分それでよいことだらうとすることすらも出來る筈がないと考へられた。

マルサスが『人口原理論』に於て取上げたる人類の將來の問題につき、彼は人種及び社會の完全性に關する二三の論文を讀んで、非常に愉快に感じた。彼は彼等が提供してくれた、人を魅するやうな光景をなつかしみ喜んで。そしてそんな幸福な改善が實現されれば、いかに仕合せなことだらうと思つた。しかしこれに達する途上には非常に大きい到庭打ち勝ち得ないほどの困難が横はつてゐると考へた。即ちこれらの議論は實證出來ないと考へた。

マルサスは人類の完全性を辯護するこれらの論者の才能あることを認める。又彼等が公正であることも疑はない。しかしこれと彼等の議論が正しいかどうかは別問題である。マルサスは議論を進めるにつけ、差當り一切の臆説を問題から切離すことを前提とするといふ。例へば或論者が人間は遂には駝鳥に變化するに違ひないと云ふかも知れない。この場合吾々はうまくこれに反對するわけにゆかない。けれどもこの論者が相當の思慮ある人をして、彼の説を信ぜしめるためには、彼は人間の首がだんだんと長くなりつつあるといふこと、唇はだんだんと堅くなり大きくなつて來たといふこと、脚が毎日その形を變へてゐるといふこと、頭髮が漸次に羽毛となつて來ようとしてゐるといふことを示さなければならぬ。そしてかくの如き驚くべき變化の起る確からしさが示されるまでは、さうなつたときの人類の幸福について彼れ是れと論じ、その疾走力、その飛行力の説明をなし、又かうなれば一切のつまらぬ贅澤などを眼中に置かず唯生命を支ふるに必要なものばかりを集めることだけに暇をつぶすだけであるから、従つて各自の勞働すべき分擔額は少く、閑な時間が澤山になるであらうなどといふやうな状態を描き出して見ることなどは、畢竟すべて時間と辯論の空費である、とマルサスは論じた。

そこでマルサスは勝手な臆説でなく、人類の永い間の經驗によつて何人も否定すべからざる二つの公準より出發して、實證的手續を用ひ、確乎不動の人口法則を導き出さんとした。二つの公準といふのは、第一は食物は人類の生存に必要であるといふこと、第二に兩性間の情慾は必要であつて、大體今のまま變りがあるまいといふことである。この二つの公準はマルサスによると吾々が人類に關する知識を有するやうになつてからの吾等の性質の確定法であつたと思はれる。そして今迄この法則について何の變化も見られなかつたのであるから、苟くもその初め宇宙の秩序を作り、萬物の利益のために、今も尚ほ確定の法則に従つて、色々の事を司つてゐる神が、そ

の力を直接に働かせることが起らない以上、右の事實がやがて事實でなくなると考へる理由はない。この公準を前提して實證的にマルサスが結論したところは、人口の増加力は人類の生活資料を生産すべき土地に於ける力よりも遙かに大きい、といふことである。前提とした二つの公準は人類の性質を貫く不易の基本原則であると考へられたのであるから、それから導き出された結論も亦萬古不動の法則であると考へられた。しかもかかる法則はただに人間にのみ關するものではなく、動植物兩界を通じての自然法則である。従つて人類は如何に理性を用ひてもこの法則から免れるわけにはゆかない。この結果として動植物界には種子の浪費と疾病と早死とがある如く、人類には窮乏と罪惡とがある。従つて不動の公準から實證的にこの人口法則を導き出すと、人類社會の完全性を信ずる議論は斥けられなければならない。この結論は實證的に到達したところであつて、それが陰鬱な色を持つてゐることは、又やむを得ないところである。マルサスは『人口原理論』の序文に於て、この陰鬱な色は繪畫そのものの現實であつて、決して色眼鏡を以て見たり、氣まぐれ者の腹立ちまぎれに描き出したものでないことをも斷つてゐる。それ故に『人口原理論』の大部分は確乎不動の公準より出發して、人口法則の結論に到達する過程を説明する實證論と、何等實證的根據を有しない反對論の排撃とである。もとより出發點となつた公準が果して不動の公理であるかどうか、且つ結論たる人口法則が正しいかどうかは問題であるが、マルサスの研究方法は彼の意識に於ては實證を以つて貫くことにあつたことは明かであり、ここに彼の經濟學の重要な特徴があつたのである。

實證主義には實證される理論が先行してゐる筈である。その理論は單純に假定されたものである場合があり、従つてそれは實證により修正され反證され、或は確證されるが、實證はそれ自身何等理論ではない。實證に先行

する理論も單純に思ひ付き、假設でなく、それ自身それが形成される一定の根據がある。かかる場合には實證はこの理論に實際の生起の事例を結びつけるにとどまる。ところがマルサスは實證を尊重する結果、理論がそれ自身據つて立つ基礎如何によつてでなく、實證的事例如何により理論の輕重を判定せんとした。具體的事例に重點を置く半面に、理論的一般化に對し消極的であつた。この點は理論的構成を必要とする『經濟學原理』を特徴づけることとなつた。

マルサスの『經濟學原理』によると、經濟學に關する科學的諸論者の間に現在廣く存在する誤謬と異見との主たる原因は、單純化し一般化しようといふ輕率な企圖にあるやうに思はれるといふ。そして彼等のより實際的な反對者は偏つた事實に屢々訴へて、餘りに早急な推理を下すのに、これ等の諸論者は反對の極端に走り、豐富な經驗によりその理論を十分に検討しない。或る部類の人々には單純化と一般化ほど魅力のあるものはない。それが眞理と矛盾せずに行はれ得る場合には、學問上望ましいことである。しかしこのためにあらゆる科學に於て未熟な理論を導くことになつてゐる。經濟學に於ても單純化の願望のあるために、特定の效果を生み出すに當つて一つ以上の原因の作用を認めしめなくなつてゐる。そして若し一つの原因が或る部類の現象の可成りの部分を説明するならば、かくの如き解決を許さない事實に十分注意を拂ふことなくして、その全體がこの一つの原因に歸せられて了つてゐる。

マルサスは更に續けて考へる。吾々が考察してゐる現象の解決に必要な、より以上の原因を認めないといふニユートンの賞讃すべき通則は、洵に尊敬に餘りあるものである。しかしこの通則自身は眞實に必要なものを認めることを斥けるものではない。事實と經驗とによつて發見せられた眞理の殿堂の前に於ては最も華麗な理論も最

も美麗な分類も屈しなればならない。三十年前の化學者はこの科學に於ける新發見が、彼の以前の體系と處置とを混亂せしめるのを遺憾とするのは當然であるが、しかしもしそれを否定する實驗が十分に確證されるや否や彼は率直にそれ以前の體系と處置とを放棄しなければ、彼は哲學者たる資格はないわけである。

この單純化及び一般化の傾向はかく一つ以上の原因の作用を認めないが、マルサスによればそれは更に修正、限定及び例外を認めない傾向を生み出してゐる。これらを認めないことは非科學的であるが、經濟學には限定や例外を絶對的に必要とする多くの重要な命題があることも眞實である。そして複雑な諸原因の頻々たる結合、原因と結果との相互間の作用と反作用及び多數の重要な命題に於ける限定と例外との必要が、この科學の主たる困難をなし、且つ結果の豫言に當つて頻々たる誤りを生ずると、マルサスは確信を以て言ふ。

マルサスの言ふところでは、未熟な一般化の傾向は又經濟學に關する主たる諸論者のあるものをして、その學說を経験によつてためして見ることを嫌はしめてゐる。孤立せる事實を不當に強調したり、首尾一貫せる學說を未だ十分檢討されてゐない二二三の矛盾せる外觀によつて否定することは避けなければならぬが、しかし如何なる學說も一般的經驗と矛盾するものは、決して正しいものとは云へない。かかる場合にはそれは根本的に誤りであるか、又は本質的に不完全であるかである。そしてその何れの場合に於いても、それは現存する現象の満足な解決であるとして採用することも出来なければ、又何程か安全に將來の行動の準據ともなし得ないものである。

マルサスによれば、哲學の第一に行ふべきことは、事物があるがままに説明することである。そして吾々の理論がこれを爲し終るまではそれは、何等かの實際的結論の基礎となつてならない。人口に關する彼の理論にしても、吾々の知るあらゆる國の社會の現狀によつて確證されなければ、確乎不動の信念もないわけである。この

理論を樹立するに當つて、かくの如く事實によつて確かめたとマルサスは云ふのである。そして經濟學上の多くの問題に於ては種々なる複雑な原因が屢々作用してゐて、この種の經驗に訴へて見ることが特に必要である。ある理論は正確であるやうに見え、そして實際與へられた前提の下に於いて正確であるやうに見えることもあらう。その上これらの前提はその理論の適用される場合の前提と同一であるやうに見えるであらう。しかし期待されたものと相違する結果が生ずるために、以前には認められなかつた相違が明かとなることがある。そしてこの場合この理論は正に失敗であると考へ得よう。豫期し得ない原因が作用して居り、従つて豫期されてゐる原因の力と能率とが大きな變化を蒙り易い場合には、誤れる理論の累積を避けるためにも、又正しい理論を確證し是認するためにも、事實に對する正確な且つ廣汎な注意が必要であるといふ。

ところでマルサスによれば、經濟學は本質的に實際的であり、そして人生の普通の事務に適用せられ得るものである。人類の知識の部門の中で、誤れる見解が害をなし、正しい見解が役立つこと、これより甚しきものは殆どない。自然の法則の研究はその一切の部門に於いて興味あるものである。宇宙の極めて遠い部分を支配し、それには勿論人間として少しも影響を及ぼし得ない物理法則ですら、高貴な合理的な好奇心の對象物である。しかし人類社會の運動を左右する法則は、これよりも遙かに有力に吾々の注意を要求し得るものであるが、それは蓋し毎日毎時吾々の關係してゐるものに關するからでもあり、又その結果が絶えず人類の干渉によつて修正されるからでもある。

有名な人々のうちには經濟學の一般的通則に極めて強い愛着をもち、ために實際上はそれには或る例外が時々起ることを知つてゐながら、公けの注意を餘りに多く且つ餘りに屢々例外の方に向け、かくて一般的通則の力と

有用性とを弱めるに至ることを恐れて、この例外に留意することを賢明にして得策であると考へないものも若干ある。マルサスはもとよりかかる人々の考へに同意しない。或は經濟學の受容せられた一般通則を以て、最も廣汎な實際的有用性あるものとして、これに極めて高い價値を置くところのもう一群の人々がある。しかし數學や化學やその他あらゆる自然科学の部門に於いて、その進歩と完成のために、別々に見たら何等特別に有利な目的に合致しないやうに思はれる如何に多くの研究が必要なことであらう。もし合理的な好奇心と單なる理由を求むる心が眞理の追求のための有効動因であることが一般に認められてゐなかつたならば、如何に多くの有用な發明が、又如何に貴重な且つ爲になる知識が失はれて終つたことであらう。

同様に經濟學に於けるより以上の研究が常に必ずしも「何のために」といふ試験の嚴格な適用に堪へなくとも、それによつてかかる研究を結局不可と決定するものでないとマルサスは考へる。しかも實際、經濟學の性質は人類の仕事と極めて密接に關聯してゐるといふところにあるのであるから、人類の知識の他の如何なる部門の命題よりも、經濟學の命題の方がより多くの試験に堪へるものとマルサスは考へた。經濟學に於いて相互に作用し反作用しつゝある原因及び結果の作用を、それ等の歸結を豫見するために明瞭に辿り、これに従つて一般的通則を樹立することは、多くの場合極めて困難な仕事である。しかしこれらの問題に屬する研究にして、それが一見したところ如何に深遠深重に見えようとも、何等かの點に於いて直接に實踐と關係をもたぬものは殆ど唯一つもない。従つて經濟學の進歩と完成のためにも、又それから期待せられ得る實際上の利益から云つても、かかる研究をなすことは疑ひもなく望ましいことである。そして如何に普通の困難や不分明があるとしても、かかる研究をなすべき餘暇と能力とをもつものが、それによつて妨げられるやうなことがあつてはならないのである。

實際多くの場合に於いて作用してゐる原因が複雑であり、それが作用する力と能率との程度が異つて居り、又妨害を惹起しさうな豫見せられない事情が數多くあるので、結果を確實に豫言することは出来ないであらう。しかし豫見される結果が確實な場合とそれが疑はしい場合との間に可成りに正確に區別の一線を引き得、更にその後の場合にはかかる不確實の理由を満足に説明し得るといふのは、確かに最も重要な知識である。何がなされ得るか、又それを如何にしてなすかを知るのは、疑ひもなく最も貴重な種類の知識である。それに次ぐものは何がなされ得ないか、又それを吾々は何故になし得ないかを知ることである。第一は吾々をして積極的善事をなし、吾々の力を増大し、且つ吾々の幸福を増大し得せしめる。第二は吾々を無効の努力の害と永続的失敗により惹起される損失と窮乏から救つてくれるのである、と考へられた。

マルサスは經濟學の研究を以上の如く性格づけた。従つて彼の『經濟學原理』の特別の目的は經驗に屢々照合し、又特定の現象の生起に共働する總ての原因を包括的に觀察し、以て實際的適用のための經濟學の一般的通則を提供するにあるとも述べられた。かかる研究方法に於ては、單純化の傾向から生ずる誤謬とは反對の種類の誤謬に陥る可能性がある。單に共在し且つ偶然的なるに過ぎない或る外貌が原因と考へられることもあらう。そしてこの誤りに基いて作られた理論は、複合的でもあり又不正確でもあるといふ二重の不利益を結合するであらう。アダム・スミスは特にこの誤りに陥り、一般的原理によつて保證されない現實の外貌から推論を下した。この點はマルサスが特に注意するところである。しかし彼は一方ではこの誤謬に、又他方では經驗に十分に照合しない誤謬に陥る處れのあることを自覺してゐるから、彼の目標は出来るだけ二つの極端の間の正しい中項を逮及し、眞理に接近せんと努力したとマルサスは考へた。

マルサスの以上の説明は至極中庸を得たものの如くであるが、しかもその經濟學が抽象的理論を推したリカアド經濟學と事實對立したことは看過できない。マルサス自らこの『經濟學原理』が論争的色彩を避けようとして努力したに拘らず、リカアドの經濟學と對立することを認めないわけにはゆかなかつた。兩者のこの對立はリカアドも亦認めるところであつた。一八一七年のリカアドのマルサス宛書簡にはこのことが語られてゐる。それによれば彼等が既に幾度も討論した諸問題に關する彼等の意見の相違の一大原因は何かと云へば、マルサスが常に特定の變化の直接且つ一時的の結果を考へてゐるに對し、リカアドはかかる直接且つ一時的の結果を全く差し置いて、専らそれから生ずる永久的の事態に注意を向けてゐる點にある。恐らくマルサスはこれらの一時的の結果を餘り高く評價し、リカアドは餘りにそれを過少評價せんとしてゐると述べられてゐる。リカアドのこの手紙に對するマルサスの返信もこの點を率直に認めてゐる。

この對立はただに一般的通則と例外との重點の置きどころが異つたにとどまらず、リカアドは現象の表皮を搔きかけて本質をつかまんとしたるに對し、マルサスは終始現象形態の變化を追ふこととなり、ここに二つの全く異なる經濟學を形成せしむることとなつた。との點よりマルサス經濟學の基本理論を考察するであらう。

- (1) J. Bonar, Malthus and his Work, 2. ed. 1924, p. 293, 堀經夫、吉田秀夫譯『マルサスと彼の業績』二九〇頁。
- (2) R. Malthus, An Essay on the Principle of Population, 1st ed. 1798, pp. 6-7, 高野、犬内譯『マルサス』初版『人口の原理』(世波文庫) 二六頁以下。
- (3) R. Malthus, Principles of Political Economy, 2. ed. 1836, p. 4 et seq. 吉田秀夫譯『經濟學原理』(上) 一八頁以下。
- (4) R. Malthus, op. cit. p. 8 et seq. 吉田譯(上) 二四頁以下。
- (5) R. Malthus, op. cit. pp. 16-17, 吉田譯(上) 二五—二六頁。

- (9) R. Malthus, op. cit. p. 18, 中野田譯(下) 三十九頁。
(10) Letters of D. Ricardo to T. R. Malthus 1810—1823 ed. by J. Bonar, 1887, p. 127, 中野田譯『リカードとマルサス』(中野田譯) 一〇頁。
(11) J. M. Keynes, Essays in Biography, 1933, p. 139.

二、マルサスの價值論の特質

まづ價值論を見よう。マルサスはミスと同じく使用價值と交換價值の區別より出發する。交換價值は一つの商品を他の商品と交換する比例であるが、それは當事者双方の交換せんとする意志と力とに依存する。交換せんとする双方の願望が存在するときには、交換比率は所有せんとする願望及びその所有を獲得する難易に基礎を置くところの、双方の相對的評價に依存するであらう。尤も個人の願望及び彼等の生産する能力が必然的に相違してゐるので、恐らくかくの如くしてなされる約定は初めは相互に極めて異なるであらう。しかし交換がくり返されると、或る時期の後には一種の平均が形成されると期待されよう。かくして總ての商品の一般の價值が樹立されよう。

各商品はかくの如くして總ての他のものの相對價值を測定し、又それはそれ等の何れの一つによつても測定されるであらう。各商品は又價值の代表者であらう。かくて各商品は多少とも正確に且つ便宜に、貨幣の二つの本質的性質、即ち價值の代表者たる性質と價值の尺度たる性質を有するであらう。一般に交換される商品のうちで貴金屬が選ばれて貨幣となり、これによつて示される價值は名目價值或は價格と呼ばれる。

二つの商品を比較するに當つて、一方が他方を購買する力は、マルサスによれば前述の如く二つの原因に、即

ちそれらの一方を所有せんとする願望とその所有を獲得する困難とに影響を及ぼす原因、及びその他方を所有せんとする願望とその所有を獲得する困難とに影響を及ぼす原因に依存する。ある一つの商品を所有せんとする願望とそれ所有を獲得する困難とに影響を及ぼす原因は、その購買力の内在的原因と名づけられよう。第一の商品がそれと交換せらるべき總ての異つた商品を所有せんとする願望とその所有を獲得する困難とに影響を及ぼす原因は、その購買力の外在的原因と名づけられよう。商品の交換價值はそれと交換される商品が引續き同一の便宜を以て獲得せられる限りに於いて、その一般的購買力に比例し得るにすぎない。しかし多數の商品は決して引續き同一の便宜を以て獲得せられるものではないことは經驗によつて知られてゐるから、吾々が一特定商品の交換價值の變動といふ場合には、殆ど常に内在的原因から生ずるその購買力のことを云つてゐるとマルサスは考へた。

前述の如く、マルサスに於ては交換價值は交換に於ける一物の他の一物又は諸物に對する比例である。そして貨幣の採用により社會が購買者と販賣者に分れるときは、需要は購買者の能力と結びつける意志であり、供給はそれを販賣する願望と結びつける商品の分量であると定義され得よう。かくなると貨幣での商品の價值又は價格は、その供給と比較してのそれに對する需要によつて決定される。ここに特に注意しなければならぬのは、價格が需要及び供給によつて決定せられると云はれるときには、それは需要のみか又は供給のみかによつて決定せられるといふ意味ではなく、その相互の比例によつて決定せられるといふ點である。

従つて價格を引上げるものは、單に現實の需要の範圍ではなく、現實の供給の範圍と比較しての現實の需要の範圍ですらなく、平和的に或る現實の生産物を分割するか、又は同一種類の將來の生産物が不足するのを妨げるために、より大なる需要の強度の表現を必要ならしめる如き、供給と需要との間の比例の變化である。そして同

様に價格を引上げるものは、單に現實の供給の範圍ではなく、現實の需要に比較しての現實の供給の範圍でもなく、一時的豊富を除去し、又は生産物の價格のそれに比例する減少なければ生産費の減少によつて生ずる不斷の供給の過剩を妨げるために、價格の下落を必要ならしめる如き、需要に比較しての供給の比例の變化である。もし需要及び供給といふ語がこのやうに理解され使用されるならば、價格は一時的であらうと永續的であらうと、それによつて決定されない場合はないとマルサスは考へた。

この見解に對しては、多數の商品の永續的價格はその生産費によつて決定せられるといふ見解が對立する。この點に關しマルサスによると、生産費のうちミスミスの述べてゐる總ての價格構成成分を含むならば、それは眞實である。しかし購買と販賣との總ての取引には、原費の如何なる考慮からも、その生産に使用せられる通常の賃金、利潤及び地代からも全く獨立して、商品の價格を決定する原理は需要供給法則である。そしてこれはただに獨占品と考へられ得べき部類の商品に對して、永續的に働いてゐるのみならず、更に總ての商品に一時的に且つ直接的に、そして總ての種類の粗生々産物に顯著に且つ優勢に働いてゐることが見られるのである。従つて最大範圍の商品の部類に關しては、現在の市場價格はそれが定まるときには、生産費とは異なる原理によつて決定せられることが認められる。

現存の市場價格が遙かにより屢々生産費に一致し、従つて専らそれによつて決定されるやうに見える製造品、特にその粗生原料の低廉な製造品の如き、別の部類の商品が實際に存在する。しかしこの場合ですら、吾々の日常經驗によると、需要供給の變動がこの生産費の影響に打克つことが明かである。そして更に吾々がこの問題をより詳しく検討するに至るときには、生産費自身はその支拂がその繼續的供給の必要條件である故にのみ、これ

らの商品の價格に影響を及ぼすにすぎないことが分るのである。しかしもしこれが眞實であるならば、需要供給の法則はアダム・スミスが市場價格と呼んだものと同様に自然價格と呼んだものをも決定することとなると考へられた。

マルサスによれば需要供給の比例に於ける先行の變化なくしては商品の市場價格には何等の變化も起り得ない。同一の主張は自然價格に關しても眞實であるか。この問題は勿論生産費の變動が需要及び供給の狀態に惹起す變化の性質、及び特に發生した價格の變化がそれによつて生ずる特別の且つ直接の原因に注意深く留意することによつて決定されなければならない。この點について總て生産費が減少するときには、價格の下落が殆ど普くその結果であるといふことを認める。しかし商品の價格を下落せしめるものは特に何であるか。マルサスによればそれは現實の又は想像上の供給の過剰である。同様に吾々は總て生産費が増大するときには、商品の價格は一般に騰貴することを認める。しかし特に價格を引上げるものは何であるか。マルサスによればそれは現實の又は想像上の供給の不足である。かかる現實の又は想像上の供給の變動がなくなれば、即ち生産費が騰貴しようが、下落しようが、供給の範圍が過剰も不足もなく、依然として正確に同一であるならば、價格の變動が起るであらうと想像する最小の理由もないと考へられた。

かくしてマルサスによれば供給の需要に對する比例は、市場價格であらうと自然價格であらうと、價格の決定に於ける支配的原理であり、そして生産費はそれに從屬して働き得るにすぎず、即ち單にこの生産費は供給が需要に對して採る通常の比例に影響を及ぼすからに過ぎないといふこととなる。マルサスの實證主義ではこの結論を強固にするために想像上の場合に頼る必要はない、現實の經驗はこの原理を最も明かに證示してゐるといふ。

生産費が決定的でないといふことの顯著な事例としてマルサスのあげてゐるのは、銀行券の額の制限によつてそれに與へられる人爲的價值といふことである。これは吾々の絶えず經驗してゐるところであるといふ。もし銀行券の供給を通貨が金屬であつた場合に、流通すべかりし金の分量に超過しないやうに制限し得るならば、銀行券は常に金と同一の價值を保つであらう、といふことはリカードも認めた正しい原理である。そしてマルサスによれば、もしこの制限が金への紙幣の兌換性がなくとも、完全に行はれ得るならば、流通手段に對する同一の需要が繼續する間は、銀行券の價值は變動しないであらうことをリカードも認めたであらうと考へた。そこでもしそれを造る費用を殆ど要しない銀行券が金と同一分量だけ供給されるために金と等しき價值に保たれ得るとすれば、それは金自身の價值はその生産費に依存するものではなく、ただその生産費が需要に比較しその供給に影響を及ぼすにすぎず、そしてもし生産費がなくなつても、需要に比較して供給が増加されないならば、金の價值はなほ依然として同一なることを示すものであると、マルサスは考へた。

一體、價值現象は假想のものではないが、吾々が五官によつて知覺し得る如き存在ではない。吾々は日常價格現象を知覺し經驗してゐるが、それと同様な意味に於て價值現象を知覺してゐるわけではない。しかもそれは確かに存在する。引力の法則が論理的に確め得る如く、價值も論理的存在である。引力の法則が個々の運動現象を通じて確め得る如く、價值現象も個々の價格現象を通じて知られる。その存在は個々の經驗的なる價格現象を支配するところの法則的論理的なるものである。それは心理に反映され心理を通じて作用するものであるが、單純に心理的なるものでもない。價值現象を所謂實證的に明かにするといふも、それは直接的には價格現象を規定するものであつて、ただ究極するところ論理的に價值關係を知るに至るのである。實證主義的なるマルサスは事物は

あるがままに説明するといふが、これは事實の單なる記述であつてはならず、現象の内部關係を理論的に明かにするものでなければならぬ。實證はこの理論にとつて代るものではない。

ところでマルサスは價値を決定するものは需要供給關係だと考へる。これは所謂實證的に推論され、經驗的に確められたところである。しかし需要供給關係によつて決定されるのは價格であつて價値ではない。しかも需要供給關係によつて決定されるのは價格そのものでもなく價格の變動である。従つて價格そのものの決定の問題が残るが、それこそ價値規定の問題である。經驗的に確めうる價格の實證的問題の奥に理論的問題があるわけである。マルサスの實證主義はこの問題を抹殺せんとした。スミスやリカードは市場價格と自然價格を區別したが、前者は價格の問題であり後者は價値の問題であつた。前者が一時的現象だと解されたのは、需要供給關係の變動により絶えず變動する價格面を考へたからであり、後者が永續的だといふのは前者の變動の基底をなす價値的なものを考へたからである。然るにマルサスは需要供給法則は市場價格のみならず、自然價格をも決定すると考へた。即ち一般に自然價格を決定するものと考へられる生産費は、マルサスによればその支拂は商品の繼續的供給の必要條件であり、従つて供給を通じてのみ價格に影響する。自然價格と雖も需要供給の制約を免れないといふ。これでは價格規定は一元化されてゐるが、自然價格の本來の意義は抹殺されてゐる。リカードもこの點に關し、マルサスは自然價格に關するスミスの定義を忘れてゐる、然らざれば彼は需要及び供給が自然價格を決定し得ようとは云はなかつたであらう、自然價格とは單に生産費の別名にすぎない、と述べてゐる。マルサスは生産費が騰貴しようが下落しようが、需要供給關係が變化しなければ價格は變化しないと主張するが、需要供給關係の變化する理由が立入つて問題とされるわけであつて、これが生産費、自然價格、價値の理論の説明せんとす

るところである。リカアドも需要及び供給が市場価格を支配することは何人によつても認められてゐる、しかし特定の價格に供給を決定するのは何であるか、それは生産費であると論じてゐる⁽⁶⁾。マルサスは需要供給の現象を所謂實證的に追求し、解くべき課題を見失つてしまつた。價格の問題を單純に需要供給關係の問題として實證的に解き得ないからこそ、その奥に價值理論の問題が展開されるのである。マルサスは需要供給の法則の絶對性を實證するために、不換紙幣の價值がその需要供給によつて決定されることを挙げたが、これは紙幣價值決定の基本的問題ではない。その始め紙幣發行が流通すべかりし金貨幣の分量を超過するかしないかといふことを、マルサスも問題とせざるを得なかつたが、その場合の紙幣價值決定が先決問題であり、それを前提せずして本來的に紙幣價值が規定されてゐるわけではない。紙幣價值の變動がその需要供給によつて左右されるその基準がなければならぬが、その基準はここにある。

もとよりマルサスも勞働及び生産費が價格に對して全然無意味だといふのではない。ただそれは商品の供給の必要條件として見るにとどまる。スマスはかかる生産費を自然價格と呼んだが、マルサスは商品を規則正しく市場に齎らすに必要な價格だといふ意味に於てこれを必要價格と呼ぶ。この自然且つ必要價格は市場價格と同様に、需要供給の原理によつて左右される。唯一の相違は、前者は需要と供給の通常の且つ平均的の比例によつて左右せられ、後者は需要と供給の異常の且つ偶然的の比例によつて決定されるといふことである。

従つてマルサスは自然價格と云はれるものがないといふのではない。スマスが説明したやうに説明すれば、それはだに明瞭なる言葉であるのみならず、更に又極めて有用な言葉であるといふ。もし一商品の自然價格が必要とされた特別の種類の勞働に對しその生産過程の種々なる部分に於て支拂はれた總ての貨幣賃金と、それが前

拂された種々なる長さの時間の間に使用せられた他の資本の總ての通常貨幣利潤と、土壤に附屬する自然力の助力によつて獲得せられた必要な原料及び食物に關する總ての貨幣地代とから成るものと考へられるならば、事態はその通常の且つ自然的の状態にあり、且つ課税せられてゐないとして、この價格と商品の通常の且つ平均的の價格とが一致することが見出されるのは全く確實である。正常に且つ有用に自然價格又は必要價格又は通常價格に市場價格は常に一致せんとしてゐる。そしてこの價格は商品が通常相互に交換される比率を決定する。かくの如く理解すれば、これ以上簡單な又はより一般的に適用せられ得るものはあり得ない、と考へられた。

マルサスは價值決定の構造上自然價格の通常の意義を抹殺せんとしたが、上述の如くその概念そのものを否定したわけではない。市場價格が需要と供給の異常偶然の比例によつて決定されるに對し、自然價格は通常且つ平均的の比例で決すると解せられた。しかし需要供給の通常且つ平均的の比例は何によつて決定せられるであらうか。多さんの比例關係のあるうちそれを以て通常平均的となすであらうか。その比例は決してそれ自身所謂自然的に定まるのではない。これでは價格の終局的規定を與へる概念とはならない。マルサスは更に自然價格を以て商品を規則正しく市場に齎らすに必要な價格と解し、この意味に於て有用な概念だともいふ。これは確かに有用な概念であるが、マルサスはかかる自然價格即ち彼の所謂必要價格が需要供給法則の基礎になるものと解してゐるわけではない。

ところでマルサスの價值論は價值決定の問題より價值尺度の問題に發展するが、ここでも彼の實證主義が貫かれてゐる。ここにまづ彼は價值の原因と價值の尺度を嚴別する。彼によれば商品に含まれた勞働はその價值の主要な原因であるが、その尺度ではない。商品が支配する勞働はその價值の原因ではないが、その尺度である。價

値の尺度を求めるのは二つの目的からである。その第一は容易に且つ便宜に、相互に比較しての總ての商品の相對價值を測定し、且つ總ての販賣者をしてその販賣によつて得る利潤を評量し得せしめるにある。この目的は貨幣によつて完全に達せられる。第二にはその供給の總ての條件を含んでの、商品を獲得する困難を測定し、そして二つ又はそれ以上の商品が時の経過中に、その相互の交換比例に於いて變動したときには吾々をしてその何れに、又如何なる程度にその各々に變化が起つたのであるかを確かめ得せしめるにある。これは特に異なる時に於ける同一の國の商品に關して極めて重要な知識である。しかし貨幣はある長さの時期に於いては内在的原因より生ずるその交換價值に於いて大なる變動を蒙るものであるから、それは尺度として用ひ得ない。

マルサスはこの問題に關シスミスの見解を検討する。彼によればスミスは勞働を以て普遍的且つ正確なる價值の尺度なりと考へてゐるが、この議論には混亂がある。彼は或は商品の價值はその生産に費した勞働量によつて決定せられると論じ、又或はそれが交換に於て支配すべき勞働量によつて決定せられると論じてゐる。しかし彼が重點を置いたのはこの後の意味であるといふ。

そして實際スミスの用ひた第一の意味に於いて、換言すれば商品がその生産に於いて費した勞働量に關して、勞働が價值の尺度たるに適する程度を考へると、それが根本的に缺陷を有することを見出すとマルサスは考へる。これは次の二つの點より説明された。

第一に一寸考へてもそれが積極的意味に於いて用ひられ得ないことが明かであるといふ。即ち商品の交換價值がそれ使用せられた勞働量に比例するといふのは、實際殆ど言葉の上の矛盾である。交換價值はその語の意味する如くに、明かにある他の商品に對する交換上の價值を意味する。しかしもし一商品により多くの勞働が使用

せられるときはそれと交換せられる他のものにもより多くの勞働が使用せられるならば、第一の商品の交換價值がそれに使用せられた勞働に比例し得ないことは明かである。もし例へば穀物を生産する勞働が増大すると同時に、貨幣及びその他多くの商品を生産する勞働が増大するならば、直ちに總ての物の價値の多少はその生産に使用せられる勞働の多少に比例すると云へなくなる。この場合に於いて、より多くの勞働が穀物に使用せられてゐるが、しかし一ブツセルの穀物が依然として以前よりもより多くの貨幣とも勞働とも交換されないことは明かである。従つて穀物の交換價值は確かにそれがその生産に於いて費した勞働の追加分量に比例して變動しないと云ふのである。

第二にマルサズによれば、たとえ吾々がこの尺度を常に相對的意味にとるとしても、言換ればもし吾々が諸商品の交換價值はその各々に使用せられた比較的勞働量によつて決定せられると云つても、それが正しいことが見出さるべき社會段階は存在しない。蓋し土地が共有なるのみならず更に筋肉的努力を助けるために殆ど資本が用ひられなかつた最も初期の時代に於ては、交換は絶えず各商品が費した勞働量には顧慮せられずに行はれたであらう。交換される物の大部分は、勞働の結果がそれについて常に不確實なところの鳥類、魚類、果實等の如き種々なる種類の粗生々産物であらう。ある者は一物を獲得するに五日の勞働を使用し、それを後に至つてより幸運な勞働者に單に二日又は恐らく一日の努力を費したにすぎないある他の物と交換するを極めて幸福とするといふこともあつたであらう。そして物の交換價值とそれが生産に於て費した勞働とのこの不比例は絶えず起つたことであらう。

しかも實際は生産費が専ら勞働に限られる社會段階は、如何に野蠻な段階でも殆どないであらうとマルサスは

考へる。極めて初期に於ても利潤が供給の必要條件として交換價值の問題に大いに入り來ることが見出されるであらう。弓矢を造るにさへ材木及び蘆が適當に乾燥され枯らされるべきことが明かに必要である。そして勞働者の仕事が終わるまでにこれ等の原料が彼によつて保持されなければならぬ時間は、直ちに價值の計算に一新要素を持込んでくる。吾々はあらゆる種類の資本に使用せられた勞働を、正に商品の直接的生産に使用せられた勞働と同一の原理によつて測定し得よう。しかし收得回收の早さに種々あることは、資本に使用せられた勞働量との關係もない全然新たな要素であり、しかも最初の並に最近の社會のあらゆる時代に於て交換價值の決定に於て最も重要なものであるとマルサスは考へた。

かくしてマルサスによれば、交換上の内在價值に關しては、一商品の生産に現實に使用せられた勞働の價值は、勞働のみが使用せられ且つ生産物が直ちに市場に齎らされるといふ稀な場合を除いては、完成商品の價值を決して表現せず又それに比例しない。大多數の場合に於ては現實に使用せられた勞働に加へて、欲求物を獲得する困難を増すところの他の價值の内在的原因があり、これは時に大きな力で働いてゐる。これは如何なる一時窮でも、又如何なる一場所でも、或は異なる時期及び異なる所に於ても明かなところである。即ち商品の生産に現實に使用せられた勞働量は價值の尺度の二大目的の何れにも合致しない。これは貨幣の如くに商品が同一の所及び時に於て相互に交換される比率を測定しないのみならず、又それは同一又は異なる時及び異なる國に於いて商品を獲得するために克服せられるべき困難又は拂はるべき犠牲の全部を測定し、そして吾々をして二つ又はより以上の商品が相互の比例に於て變動したときに、その何れに又如何なる程度にその各々に變動が起つたのであるかを云はしめることもできないと考へられた。¹⁰⁾

需要供給關係により價值形成を規定すると、價值尺度の問題解決に於て極めて困難な事態に陥ることは明かである。蓋しマルサスの追求した價值尺度は不變性を有するに拘らず、需要供給法則は變動の説明原理であるから、需要供給關係から不變的な價值尺度を導き出すことが困難であるからである。マルサスが價值尺度を求めて彷徨するのも當然である。そこで彼はまづ彼の理論の出発點となつた勞働價值説に戻つて投下勞働を検討した。しかし既に價值成立について勞働價值説を放棄してゐるのであるから、商品の生産に必要な勞働量を以て價值尺度となすことは上述の如く困難であるが、マルサスの考へた勞働は個別勞働であるから、かりに勞働價值説を採つたにしても、價值尺度の説明に行詰るわけである。

價值尺度を形成するために、一商品がその生産に於て費した勞働が同時に眞實價值及び相對價值の尺度であるといふ原理に従ひ、もし總ての時に於てその生産に同一の勞働量を費した物品が見出されるとするならば、それは價值の正確な且つ標準の尺度として用ひられると一應考へられよう。しかしそれにしても貴金屬はこの性質を持たないとマルサスは考へた。蓋し世界は異なる時代に於て異なる程度の肥沃度の鑛山から供給を受けてきてゐる。この肥沃度の相違は必然的に異なる勞働量が異なる時に同一量の金屬の生産に必要とされることを意味する。更に鑛山採掘に異なる時代に用ひられたる異なる程度の熟練は、一定量の鑛貨がそれを市場に齎らすに費した勞働量の變化を生ずる原因であるという。

かくしてマルサスによれば貴金屬の生産に於ける如何なる種類の齊一も、たとひ總ての國が自國自身の鑛山を所有してゐても、又もしその大部分がその貨幣を他國から購買せざるを得ない時は更に一層、商品の貨幣價格を以て恐らく同一の又は異なる國に於ても、又同一の又は異なる時期に於ても、それに使用せられた勞働量の正確な尺

度たらしめ得ない。尤もかくの如き事情にある貴金屬がどれだけ商品の交換價値のよい尺度であるかは別問題である。貴金屬はそれが如何様にして獲得せられようとも、それが同一の時及び所に於ける正確な尺度である。そして確かにその獲得方法が變動を蒙ること少なければ、少なきほど、それは益々異なる時及び異なる所に於ける交換價値の尺度に接近するであらう。もし各國民が常に貴金屬を資本の前拂を要せず同一の労働量によつて獲得し得るならば、外國通商によつて惹起される一時的波瀾と機械の突然の發明とを別にすれば、それが支配すべき労働に關しての貨幣での交換價値は總ての國及び總ての時に於て同一であらう。この假定された場合、即ち貴金屬の労働での原費が常に労働でのその交換價値と同一である如き場合には、貨幣は常に同一の労働の分量を費し且つ同一の分量を支配するであらうから、確かに均一の價値をもつであらう。しかし何等かの種類の資本が用ひられた商品に關しては、貴金屬にか又は相互に比較してのその價値は、それが費した労働に決して比例し得ないとマルサスは考へた。¹⁾

ここでマルサスは價値尺度として貴金屬に大なる望みを囑したが、これもごく限られたる條件のもとに於てであつた。それは貴金屬も一つの商品として扱はれてゐるから、個別的労働による規定以上には出られず、一般等價形態としての貨幣の形成を看過したからである。殊に肥沃度の異なる鑛山の貴金屬價値に個別的の差異のあることを述べたが、これは所謂鑛山地代の形成される契機であつて、貴金屬が一般等價形態となるを妨げるものではない。

次に價値尺度として支配労働はどうであらうか。上述の如くマルサスは同一の時に於て且つ相應の短い期間内に於て、貴金屬が商品の相對價値のよき尺度であることを認めたと、商品の相對及び名目價値に關し貴金屬につ

いて眞實なることは支配勞働についても眞實であると考へた。例へば同一の所及び時に於て異なる商品が支配し得る異なる分量の日傭勞働はその交換上の相對價値に正確に比例するであらう。そしてもしその何れか二つが同一種類の勞働の同一分量を購買するならば、それは普く相互に交換されるであらうといふ。

しかしマルサスはこれを勞働のみならず、あらゆる商品に擴大してゐる。即ち同一の所及び同一の時に於てはあらゆる商品は他のものの相對價値の正確な尺度と考へられ、勞働について云つたことは毛織布、綿、鐵等についても云はれる。同一の時及び同一の所に於て一定の品質の毛織布、綿、鐵の同一量を購買又は支配すべき或る二つの商品は、同一の價値をもち、又は相互に交換されるであらう。もし吾々が正確に同一の時をとるならば、このことは眞實であらう。しかしもしも吾々が異なる時期をとるならば、この比較は全く駄目にならうと考へられた。²³⁾

マルサスは不變的なる價値尺度を求めて投下勞働、貴金屬、支配勞働、毛織布、綿、鐵等と徃ひ歩いたが、満足すべきものを獲なかつた。それは價値形成の基礎を需要供給關係以上につきとめ得なかつたばかりでなく、その顧みた勞働も個別勞働に終り、一般等價形態の形成される過程並にその場合の勞働を看過したからである。従つて價値尺度の理論を展開し得ず、ただ實際上所謂實證的に貨幣が他の何れの商品よりも遙かによりよい價値尺度だと考へられたにとどまる。マルサスによればその最も重要な理由は、普通勞働に對するその比例がただに毛織布、綿、鐵等よりもより遅く變化するのみならず、更に殆ど普遍的な交換の媒介物として採用されて來てゐるので、ある特定のところに於ける勞働に對するその比例は、そのところの住民には常に知られてゐる筈だといふ點にある。そしてかかる比例が知られて居り且つ依然一定である間は、商品の貨幣價格は、ただにその相互の比例

を表現するのみならず、更にそれを獲得するの困難、その繼續的供給の條件及びそれが如何なる状態にあるときであらうと、需要に比較しての供給を表現するであらう。従つて貨幣はかかる事情のもとに於ては、言換れば勞働に對するその比例が知られて居り且つ依然一定である間は、交換上の相對及び内在價值兩者の尺度であると考へた。

マルサスに於ては前述の如く勞働のみによつて生産せられ且つ直ちに市場に齎らされる商品に關しては、それを使用せられた勞働は平均してそれが支配すべき勞働と正確に同一でなければならぬ。しかし總ての商品の相互の比例は如何にそれが各種各様に構成されてゐようとも、同一の時及び所に於てはそれが各自支配する勞働量に正確に比例する。勞働のみの内在的原因から生じようと、又は利潤、地代及び租税と各種の比例で結合せる勞働より生じようと、又は一時的稀少又は豊富によつて影響を蒙つたものであらうと、とに角双方の場合に於ける或る商品の價值は、それが支配する各時期の勞働量によつて測定されると考へられた。¹³⁾

しかし尙ほマルサスに於ては勞働は總ての他の商品と同様に、それに對する需要に比較してのその分量の多少によつて變動し、そして異なる時及び異なる國に於ては極めて異なる分量の第一生活必需品を支配する。そして更に熟練及び勞働がそれを以て適用される機械よりの助力の程度が異なるによつて勞働の生産物は勞働の分量に比例しない。従つて勞働はその語が用ひられ得る如何なる意味に於ても交換上の眞實價値の正確な且つ標準の尺度とは考へられ得ないといふこととなつた。¹⁴⁾

かくしてマルサスによれば一般に如何なる一商品も交換上の眞實價値の標準尺度とは考へられない。しかし穀物と勞働とはある場合に於ては唯一つの物よりも交換上の眞實價値のよりよき標準であり、しかも實際的適用の

ためには十分に用ひられると考へられた。即ち彼によれば一定の質の穀物のある分量はある數の人類を支持するその能力によつて、常に一定の且つ不變的使用上の價值をもつてゐる。しかしその交換上の眞實價值及び名目價值の兩者は、ただに毎年かなりの變動を蒙るのみならず、更に毎世紀かかる變動を蒙る。經驗によつて人口と耕作とはその相互の依存にも拘らず、常にも必ずし等しい歩調を以て進むものではなく、その運動の速度に於て著しい變動を蒙るものであることが見出されてゐる。年々の諸變動を別にして穀物はある時には労働その他の商品に比較して多年の間高價であり、又他の時には同一の物に比較して同様の期間低廉になつてゐるといふこともある。従つてマルサスの實證では各年毎にと同じく各世紀毎に、一定分量の穀物はある特定商品が交換に於て支配すべき生活必需品、便宜品及び娛樂品の分量を極めて不完全にしか測定しないことが分るのである。

次にアダム・スミスの提議せる尺度たる日傭労働をとつても、同一の觀察が妥當するとマルサスは考へる。即ち労働も各世紀毎にその價值を變動せしめ、各世紀毎の交換上の眞實價值の正確な尺度たり得ない。

かくしてこれ等二物の何れも一つ一つをとつた場合には、満足な價值尺度と考へられないけれども、しかも兩者を結合することによつて恐らくより正確な尺度に接近し得るとマルサスは考へた。蓋し穀物が労働に比較して高價なときには労働は穀物に比較して必然的に低廉でなければならぬ。即ち一定分量の穀物が最大分量の生活必需品、便宜品及び娛樂品を支配する時期には、一定分量の労働は常に最小分量のかかる物を支配するであらう。そして穀物がそれ等の最小分量を支配する時期には労働は最大分量を支配するであらう。そこでもし二者の中項をとるならば、その各々の反對方向への同時的變動によつて訂正され、そして最も距たれる時期に於て、且つ人口と耕作との増進が蒙る總ての變化する事情のもとに於て、生活必需品、便宜品及び娛樂品の同一分量をその何

れよりもより正しく測る一尺度が得られるとマルサスは考へた。¹⁵⁾

マルサスは不變的なる價值尺度を求め、苦心の結果穀物と勞働の平均値に到達した。これは確かに窮餘の一策である。しかしもとより穀物と勞働の價值が常に反對の方向に變動するとは考へられず、この點はリカアドも強く反對したところである。¹⁶⁾この結論はマルサスに於ても樂に導き出されたものでなく、この後も再考吟味されたところである。一八二三年に發表された彼の『價值尺度論』(The Measure of Value stated and illustrated, with an application of it to the alterations in the value of the English currency since 1790) はその産物である。この書物に於てマルサスは再びスミスの見解を中心に研究を重ねたが、商品が支配する勞働はその自然及び交換價値の標準尺度と考へてよいといふ結論に到達した。¹⁷⁾これは明かに『經濟學原理』初版に於ける穀物と勞働の平均値といふ結論とは異なるものである。マルサスはこの訂正を率直に認め、前著に於ける平均値の見解は間違つてゐた、勞働のみが眞の尺度だと信ずると述べられた。そして『經濟學原理』第二版に於ても平均値の説明は削除された。¹⁸⁾しかし價值尺度たる勞働は支配勞働であつて、一商品が支配する勞働量がその商品の供給條件、即ちその自然價値を表すと考へられた。¹⁹⁾従つてかかる支配勞働は價值形成に於ける終局的なものでなく、需要供給關係が決定的で、この價格及び價值支配が絶對且つ普遍的だといふ結論となつた。²⁰⁾この點では『經濟學原理』も『價值尺度論』も同じ考へによつて貫かれてゐる。『價值尺度論』に説かれてゐるところでは、『經濟學原理』初版に於て商品が支配する勞働が正しい價值の標準尺度とは思はなかつたけれども、しかし知られるあらゆる物の標準に最も近いものと考へたので、この點が『尺度論』で一層明瞭となつたといふのである。²¹⁾彼の所謂實證的なる研究ではこれ以上の理論は不可能であつた。

マルサスは經驗に基き實證的に研究すると云ひながら、現實に價值尺度として作用する貨幣の意義を十分に考へなかつた。貨幣は確かに諸商品に對し價值尺度であることをマルサスも認めたが、その價值が不變的でないことを以て完全なる價值尺度となし得なかつた。貨幣も貨幣商品としてその需要供給關係とは別にその勞働價值に於て變化的であるが、そのことは貨幣をして價值尺度たる職能を發揮せしめるに不完全たらしめるものではない。貨幣商品の價值變動はすべての商品に對し同時に一樣に影響するが故に、貨幣商品の價值で測られる諸商品の價值表現の相互關係は變化しない。もとより諸商品の價格は時間的繼續の過程に於て諸商品の價值が變化しない場合に、貨幣價值が騰貴すれば低落し、反對に貨幣價值が低落すれば騰貴する。しかし一定の貨幣商品はつねに價值尺度として作用する。一定の貨幣商品が價值尺度として作用するのは、諸商品が貨幣商品もるともに價值的に等質化されてゐるからである。しかも貨幣は直接に一定の勞働時間を代表せず、具體的な貨幣商品である。従つて貨幣は價值的に等質化された諸商品に對し價值尺度であるのみならず、一定の金屬重量として價格の標準となる。貨幣が一定の金屬重量として示されるのは價格の標準としてであつて價值尺度としてではない。金の價值が如何に變動しても種々なる分量の金は相互に同じ價值關係にあるから、價格の標準としての職能は妨げられな⁵。

- (1) R. Malthus, Principles of Political Economy, 2. ed. 1836, p. 50 et seq. 吉田秀夫譯『經濟學原理』(上)八三頁以下。
- (2) R. Malthus, op. cit. p. 61 et seq. 吉田謙(上)一〇九頁以下。
- (3) R. Malthus, op. cit. pp. 67—68, 吉田謙(上)一一九—一二〇頁。
- (4) R. Malthus, op. cit. p. 69 et seq. 吉田謙(上)一二二頁。
- (5) D. Ricardo, Note on Malthus' "Principles of Political Economy" (1928) p. 19, 吉田謙(上)『經濟學原理』(上)

一一五頁。

- (6) D. Ricardo, op. cit. p. 19, 吉田譯(上)一二四頁。
- (7) R. Malthus, op. cit. pp. 77—79, 吉田譯(上)一三五—一三九頁。
- (8) R. Malthus, op. cit. p. 83 et seq. 吉田譯(上)一四三頁以下。
- (9) R. Malthus, Principles of Political Economy, 1st ed. 1820, pp. 85—88, 吉田譯(上)一四七—一五一頁。
- (10) R. Malthus, Principles of Political Economy, 2. ed. 1936, pp. 92—93, 吉田譯(上)一七九—一八一頁。
- (11) R. Malthus, op. cit. 1st ed. pp. 108—109, pp. 117—118, 吉田譯(上)一八一頁、一九二頁—一九三頁。
- (12) R. Malthus, op. cit. 2. ed. pp. 94—95, 吉田譯(上)一九五—一九七頁。
- (13) R. Malthus, op. cit. 2. ed. p. 97, 吉田譯(上)二〇〇頁。
- (14) R. Malthus, op. cit. 1st ed. pp. 125—126, 吉田譯(上)二一九頁。
- (15) R. Malthus, op. cit. 1st ed. pp. 126—129, 吉田譯(上)二四九—二五三頁。
- (16) D. Ricardo, Note on Malthus' "Principles of Political Economy" (1923) pp. 40—41, 吉田譯, ヲルカス『經濟學原理』(上)二五〇—二五二頁。
- (17) R. Malthus, The Measure of value, 1823, p. V, 三邊津一郎譯, ヲルカス『價值尺度論』三四頁。
- (18) R. Malthus, op. cit. p. 23, 三邊譯, 四九頁。
- (19) R. Malthus, op. cit. p. 18, 三邊譯, 四五—四六頁。
- (20) R. Malthus, op. cit. p. 59, 三邊譯, 七三頁。
- (21) R. Malthus, op. cit. pp. 60—61, 三邊譯, 七五頁。
- (22) cf. Marx, Das Kapital, (Engels Ausgabe) I, S. 59 ff. 長谷部文雄譯, I二九九頁以下, D. Ricardo, Note, p. 216, 吉田譯, ヲルカス『經濟學原理』(下)三二〇頁。

三、富の増進論の意義

マルサスの經濟理論は價值論を出發點とし、資本蓄積の問題に至つて特に特色あるものとなつてゐる。マルサスはこの點につき、富の繼續的創造及び増進に對する最も直接的且つ有效な刺戟物は何であるか、といふ問題を解決することにより理論を展開する。彼は富の増進の直接的原因として人口増加、節約、土地肥沃性及び勞働を節約する發明の四つの要因を検討した。そして今日の均衡理論に於ける所謂「變化法」により、均衡状態に於て一つの要因のみが變化する結果を明かにし、過剰生産に導くものは過剰節約のみであるといふ結論に達した。この推論に於てもマルサスは彼の實證的方法を貫かんとした。

まづ人口増加について彼の研究したところによると、人口は消費の大なる源泉であるが故に、その増加は生産物の増大に對する需要を維持し、従つてその供給の繼續的増大を伴ふと人々は考へる。マルサスによれば人口の繼續的増大が需要の増大の有力にして必要な要素であることは容易に認められる。しかし人口の増大のみが、又はより正當に云へば生活資料の限界を緊迫する人口の壓力が、富の繼續的増大に對する有效なる刺戟を與へるものでないことは理論上も經驗上も確證せられるといふ。即ち私有財産權が確立され、そして社會の欲求品が勤勞と物々交換によつて供給される場合には、生活必需品、便宜品及び奢侈品を所有せんとする如何なる個人の願望も、それが如何に強烈であつても、彼の所有する何物かに對する有效需要が何處にもないならば、それらの生産には何等役立たない。勞働をその唯一の所有品とするものが生産物に對する有效需要を有するか否かは、彼の勞働が生産物の處分權をもつものによつて需要せられるか否かによるものである。そして生産物がそれが獲得せら

れたるときに、それを獲得せる労働よりもより大なる價值をもたない限り、生産的労働は決して需要せられ得ないであらう。生産により以上の人數を使用することを保證するためには、新たな労働者によつて惹起される需要に先立つて、且つこれから獨立して問題の商品の需要供給の前以ての状態の中に、又はその價格のうち、ある物がなければならぬ。ところが人口の増大は賃金を引下げ、そしてかくして生産費を減少することによつて資本の利潤と生産物に對する刺戟とを増大せしめるであらうと云はれるかも知れない。マルサスによればかかる一時的結果はなるほど起るかもしれないが、しかしそれは明かに著しく限られたものである。賃金の下落がある點以上に達するときには、必ずやただに人口の増進を停止せしめるのみならず、更にそれを減少すらせしめずには置かない。そしてこの點に達する以前に、より以上の人數の労働によつて惹起された生産物の増大は、資本家をしてより少い労働を使用するに決せしめるほどに、その價値を引下げてしまつて居り、そして利潤を低減してしまつてゐる。従つて理論上人口の増大は追加労働量が欲求せられないときには、間もなく職業の缺乏と雇傭せられたるものの受けるところの少きとによつて妨げられ、そして生産力に比例せる富の増大に對する必要な刺戟を與へないとマルサスは考へた。

しかももしこの問題に關する理論についてなほ何かの疑問が残るとしても、それは確かに經驗によつて消散せられるであらう、とマルサスはいふ。吾々が世界の如何なる國民に眼を向けても、殆どつねにこの驚くべき確證が見られる。即ち殆ど普遍的に吾々の知る總ての國家の現實の富は、その生産力に及ばざること甚だ大である、と彼の實證主義的關心を明かにした。²⁾

人口についてマルサスは富の増大に對する第二の刺戟と考へられる資本蓄積、或は資本に追加せんがための收

入よりの貯蓄を検討する。彼によれば資本の繼續的増大なくしては富の永續的且つ繼續的増大が起り得ないことは確かに眞實である。しかし一般に一國民を蓄積に向はしめる事態は何であるか。更にその蓄積をして最も有效ならしめ、且つ資本及び富のより以上の、又は繼續的の増大に導く傾向ある事態は何であるかを研究しなければならぬと考へられた。

彼によれば節約によつてある國の生産物中の通常以上に遙かにより以上大なる部分を、直ちに生産的労働の維持に向けることは疑もなく可能である。そしてかく生産的に使用せられた労働者が、不生産的労働者と同様に消費者であり、従つて労働者の關する限りに於ては、消費又は需要の減少の少ないであらうことは全く眞實である。しかし生産的労働に使用せられたる労働者によつて惹起された消費及び需要は、そのみでは資本の蓄積と使用とに對する誘因を決して與へるものでない。そして資本家自身並に地主その他の富めるものに關して云へば、彼等は假定によれば節儉家であり、その通常の便宜品及び奢侈品を減じてその收入から貯蓄をなし、そしてその資本に追加するに一致してゐる。かかる事情のもとに於て生産的労働者の數の増大によつて得られたる商品の分量の増大が、恐らくはその價值を投資の價值以下に下落せしめる。又は少くとも貯蓄の能力も意志も著しく減少せしめるほどに利潤を低減する價格の下落を見ずして購買者を見出すことは不可能であると考へられた。³⁾

ところがこの點に關聯して考慮しなければならぬのはセイ等の販路理論である。それによれば特定商品の供給過剩(over)は容易にあり得ようが、商品一般の供給過剩はあり得ない。蓋し商品はつねに商品と交換せられるが故にその一半は他の一半に市場を供する。そして生産はかくの如く需要の唯一の源泉であるが故に、一商品の供給の過剩は單にある他のものの供給の不足を證するにすぎず、従つて一般的過剩は不可能であるからといふので

ある。しかしマルサスはこの學説は全然無根據であり、且つ需要供給を左右する原理に矛盾するものと考へる。即ち商品はつねに商品と交換せられるといふことは眞實でない。多量の商品は生産的勞働が不生産的勞働と直接交換せられる。そしてこの商品量がそれと交換せらるべき勞働と比較して過剰のために價值が下落し得ようことは、ある一商品が勞働が貨幣かに比較して供給の過剰のために價值が下落するのと正に同様である。マルサスによれば假定された場合に於ては明かに不生産的勞働者が資本の蓄積によつて生産的勞働者に轉換せられたがために、異常の分量の總ての種類の商品が市場にあるであらう。しかるに勞働者の數は全體として同一であり、そして地主及び資本家の間に於ける消費のための購買せんとする能力及び意志は、假定によつて減少されてゐるのであるから、商品の價值は勞働に比較して必然的に下落し、延いては利潤を著しく低め、そして暫くの間、より以上の生産を妨げるに至るであらう。しかしこれこそが正に供給過剰なる語の意味するところであり、しかもこの場合それは明かに一般的であつて部分的ではないと述べる。

マルサスによればセイヤリカアドは商品をもつて消費者の數及び欲求に關與せしめなければならぬところの消費物品でなく、單純に數學上の數字のやうに考へてゐる。といふのはこの場合消費者の數と欲求とを比較するならば、欲求が節約によつて減少してゐるのに生産物が大いに増加することは、必然的に勞働で測定せられた價值を大いに下落せしめなければならず、その結果、同一の生産物はたとへ以前と同一分量の勞働を費したとしても最早同一分量を支配せず、そして蓄積の能力と蓄積せんとする誘因との兩者は甚しく妨げられるからといふのである。

かくして収入の資本への轉換がある點以上におし進めることによつて勞働者階級を失業せしめるならば、それ

以上節約的慣習を採用することは最初は最も悲慘なる結果を伴ひ、且つ後には富と人口との顯著なる減退を伴ふと考へられた。しかしもとより節約又は消費の一次的減少も屢々富の増進に絶対に必要でないといふのではなから。一國家は確かに消費によつて滅亡され得よう。そして現實の支出の減少はただにこの故に必要であるばかりでなく、更に一國の資本がその生産物に對する需要に比較して不足してゐるときには、そのみが將來に於ける消費の増大の手段を與へ得るところの資本の供給をなさんがためには消費の一次的節約は必要である。彼の特に強調するのは如何なる國民も消費の永續的減少より生ずる資本の蓄積によつては恐らく富み得ないといふことである。蓋しかかる蓄積は生産物に對する有效需要を充すために要する程度以上に著しく出づるものであるから、その一部分は極めて程なくその用途もその價値も失つて了ひ、そして富たる性質をもたなくなつてしまふからである⁵⁾と考へられた。

マルサスのこの見解は極めて重要である。販路理論はセイ、リカアド、ジエムス・ミル等によつて説かれたる古典學派の代表理論であるだけに、これに對するマルサスの反對論は、注意に値する。セイ等は單純なる商品生産を假定し需要と供給の一般的一致を主張したが、マルサスは節約、即ち資本蓄積を契機として需要供給の一般的不一致、過剰生産を推論した。しかし収入の資本への編入、即ち蓄積は需要供給の一次的切替えにすぎない。この點はリカアドも強く反駁したところである。即ちリカアドは消費者の欲求が、一般に節約によつて減少されるといふことを否定する。それは消費力とともに他群の消費者に移轉されると主張する⁶⁾。或は収入からの資本の増大とは、不生産的労働者に代へて生産的労働者による消費の増大のことである。消費はその何れに於ても同様に確實であり、相違は單にその代償たる生産物の分量であるにすぎないとも述べてゐる⁷⁾。リカアドのいふ如く節

約は購買力を消費よりマイナスして資本にプラスするにとどまり、全體としての需要供給を齟齬せしめるものではない。需要供給の調和的循環は断ち切れない。

しかしマルサスが販路理論の調和的循環を断ち切らんと努力したことは注意しなければならぬ。惟ふに十九世紀に入つてからの資本主義經濟の發展の生み出す調和的循環の破壊は恐慌的な過剰生産となり、それが時を定めて現はれることにより景氣變動を進行せしめることとなつた。セイ、リカード等の古典理論はこれを最初から無視したわけではないが十分に説明し得ず、結局それが一時的部分的なるの理由をもつて一般理論としての説明より追放せんとした。しかるに現實感の強い所謂實證主義的なるマルサスは、この事實を率直に一般的事實として認め上述の理論を展開するに至つたと思はれる。

しかしここで注意されるのは、第一にマルサスの實證主義の動搖である。彼の實證主義は元來一定の、或は假設の理論を經驗事實によつて確かめることであつたが、ここでは逆に與へられたる事實を如何に理論的に説明するかが重要である。所謂實證はそれに後續するものではない。

第二にマルサスはここで一時的部分的變化でなく、永續的一般的變化を求めんとしてゐる。これは一時的部分的變化を尊重したるマルサス經濟學の他の部分とは異なる。マルサスと對立するリカードは永續的一般的假向を追求したが、この問題では又マルサスとは逆に一時的部分的變化を強調した。何れも異様な方向に問題解決を發展せしめた。吾々はここに異様な感を懷く前に問題の重要性を反省しなければならぬ。資本主義經濟が何等の矛盾なく調和的に進行するか、時々過剰生産恐慌をもつて自己矛盾を再生産しながら進むかは、本質的問題である。これを説明する理論の當否が問題となる以前に、事實そのものを是認するか否かが問題であるのを見ても、その

重要性が明かである。

第三に一般的過剰生産の事實を認めることにより、從來古典經濟學の公理の如くに考へられてゐた販路理論に異議を唱へることは、それが古典經濟學の有力なる一翼たるマルサスによつてなされただけに、その論證は失敗に終つても重大なる意義を有する。或はマルサス理論が失敗しただけに、後に一般的過剰生産の事實を論證せんとする幾多の試みが現はれることとなつたが、これらは古典理論より出發するか如何を問はず、古典理論を修正し或は廢棄することとなつた。

人口増加、資本蓄積につづいて、富の繼續的増大に對する一刺戟として土地の肥沃度につきマルサスは如何に考へたかといふと、それは必ずしも刺戟とならずといふ消極的見解をとつた。これこそ所謂實證的に各國の事例を以て論證されてゐる。即ち彼の實證の結果によれば近代に於いては廣大な且つ極めて肥沃な國がその自然的資源を十分に使用した事例は起つたことがなく、他方小さな且つ肥沃ならざる國家が外國通商によつてその狹隘なる限界内にその物理的能力から期待せられべきものを大いに超過する額の富を蓄積した事例は極めて多いといふ。蓋し土地の肥沃度のよいことは人々の懶惰を生じ、それが却つて富の増進を阻むことが多い。例へば一週間二日の労働によつてその家族に必要な食物を獲得し得る人は、食物の獲得に四日を用ひなければならぬ人よりも便宜品及び奢侈品を獲得するために遙かに長く働く物理的能力をもつてゐる。しかしもし食物を獲得する便宜が懶惰の習慣を産み出すならば、この懶惰は彼をして便宜品及び愉樂品を所有するの奢侈を措いて殆ど又は全然仕事をしないといふ奢侈を選ばしめるであらう。そしてこの場合には彼はより多くの勤勞を食物の獲得に使用せざるを得ない場合よりも、より少ない時間を使ひ便宜品及び愉樂品のための労働にあて、そしてそれらをより少し

か手に入れないであらう。マルサスはこれを諸國の事例によつて實證せんとした。そしてその結論として土地の肥沃度のよいことは、富及び人口の急速なる増大に對する適當な刺戟を與へずして、それらが置かれ來つてゐる現状のもとに於ては、ある程度の懶惰を産出し、それは幾時代を經過した後、それらを貧しく且つ人口稀薄にしてゐることが分るといふことになつた。或は少くとも一般的には土壤の肥沃度はそれのみでは富の繼續的増大に對する適當な刺戟でないことが結論された。

最後に勞働を節約する發明は富の繼續的増大に對する一刺戟と考へられようか。マルサスに従へば勞働を節約する發明はそれに對し決定的な需要がある時の外は、何等が大なる範圍に起ることは稀である。それは進歩と文明との自然的結果であり、そしてそのより完全な形に於ては一般に土地に於ける衰へゆく生産力を援助することになるものである。土壤の肥沃度は天與の賜物であるから、それが欲求されると否とに拘らず存在し、従つて屢々多年の間それを十分に使用する能力を超過してゐなければならぬ。筋肉的努力に代へるに機械を以てする發明は、人間の器用さの結果であり、そして彼の欲求によつて齎らされるものであるから、期待されよう如くにかかる欲求を超過することは稀であらう。

しかしマルサスによると土地の肥沃度と發明には同一の法則があてはまる。それ等は共に生産の便宜といふ項目に屬する。そして兩方の場合に於てそれが與へる供給能力が適當な市場の擴張を伴はないかぎり、この便宜は十分に利用され得ない。勞働を節約することにより財貨を以前よりも遙かにより低廉な比率で市場に齎らすところの機械が發明されるときには、最も通常の結果は財貨が遙かにより多數の購買者の能力以内に齎らされるので、新たな機械でつくられた財貨の全量の價值がその以前の價值を大いに超過するに至るほどに、それに對する

需要が擴大することであり、従つて勞働の節約にも拘らず、より少數ではなく、より多數の入手がその製造に必要とされるといふ。従つて機械の採用がその富裕化能力、又は國の内外の商品の價値及び分量の兩者を増大するその傾向を理解することは困難であると考へられた。

マルサスに於ては基本的には需要或は市場が土地の肥沃度、技術の進歩の利益を制約すると考へられた。しかし生産の便宜が國の内外共に市場を開拓する最も有力な傾向をもつことは一般に知られてゐるところである。従つて現實の事態に於ては機械の採用から大きな利益が期待せられ、そして何等かの永續的害惡を危惧する理由は殆どない。しかもなほ吾々は機械を以て筋肉勞働に代へることから得られる屈指の利益は、生産せられたる商品に對する市場の擴張と消費の増大とがなければこの利益は大いに減少されなければならぬとマルサスは考へる。即ち土地の肥沃度とよき機械の發明は何れも莫大な生産力を齎すものであるが、これらの大なる生産力の何れも、もし社會の位置及び諸事情又は習慣及び嗜好が十分な市場の開拓と適當な消費の増大とを妨げるならば、十分に發揮せしめられ得ないと考へられた。

この見解は依然としてリカアズと對立する。即ち彼の批判によれば市場の擴大、外國貿易から利益が得られることは明かである。廣大な外國市場があつて機械が改良されるならば、それはかかる利益なき改良よりも吾々に遙かにより便宜であらう。しかしこれは今の論點でなく、吾々の知りたいのは改良は何等の事情のもとに於て吾々にとり便宜以外のものであり得るか否かといふことである。従つて機械の使用に關して世界は一つの大きな國と考へてよい。この場合にはマルサスは機械の最も廣汎な使用に反對しない。しかしそれならばある事情により外國と通商しない極めて限られた地域に住む人民も資本の蓄積、土壤の肥沃度及び勞働を節約する諸發明から純

粹の利益を得ると考へて差支へないではないかとリカアドは論ずる。マルサスはこれらから利益が得られるには需要を伴はなければならないといふが、リカアドは需要は供給に依存すると考へるから豊富な商品を獲得する手段は決してこれらの便宜以外のものではあり得ないと論ずる。¹²⁾ここでも販路理論を破壊することはマルサス理論を以てしては不可能であつた。

以上によつて生産に好都合と考へられる資本の蓄積、土壤の肥沃度及び労働を節約する諸發明は、總て同一方向に作用することが明かにされた。そしてそれらは總て需要を顧みずに供給を便宜ならしめる傾向をもつ故に、それらは別々にも又一緒にも富の繼續的増大に對する適當な刺戟を與へるものでないとマルサスは結論した。

- (1) cf. E. Lutz, Das Konjunkturproblem in der Nationalökonomie, 1932, S. 17, S. 19.
- (2) R. Malthus, Principles of Political Economy, 2. ed. 1838, pp. 311—313, 吉田譯(下)一七七一—一七九頁。
- (3) R. Malthus, op. cit. pp. 314—315, 吉田譯(下)一八二—一八三頁。
- (4) R. Malthus, op. cit. pp. 315—317, 吉田譯(下)一八八—一九二頁。
- (5) R. Malthus, op. cit. pp. 326—327, 吉田譯(下)二二三頁。
- (6) D. Ricardo, Note on Malthus' "Principles of Political Economy," (1928) p. 164, 吉田譯『マルサス『經濟學原理』(下)一六一頁。
- (7) D. Ricardo, op. cit. p. 174, 吉田譯二二四頁。
- (8) R. Malthus, op. cit. 2. ed. p. 331, pp. 335—337, p. 344, 吉田譯(下)二二〇—二二二頁、二二八—二三二頁、二四二頁。
- (9) R. Malthus, op. cit. 2. ed. pp. 351—352, 吉田譯(下)二七三—二七四頁。
- (10) R. Malthus, op. cit. 2. ed. p. 360, 吉田譯(下)二六六—二六七頁。
- (11) D. Ricardo, Note, p. 194, 吉田譯(下)二六六—二六七頁。
- (12) D. Ricardo, op. cit. pp. 197—198, 吉田譯(下)二七三頁。

四、マルサスとケインズ

經濟學は經驗的なる經濟現象を研究對象とし、そのうちに作用し、それを支配する法則を研究する。それは經驗を基礎とし、一定の假設のもとに形成される理論であり、抽象的であるが、現實の經驗事實を説明する原理である。現實の經驗事實を説明するといつても、それを模寫するわけでなく、その運動のよつて來る所以を一般的に明かにする。しかも經濟理論はそれ自身理論的であるのでなく、それが個々の經驗事實を統一的に説明することとに於て理論的である。それが又實證的なのである。實證的といふのは基本的には任意の理論の正しさを經驗事實によつて明かにすることではなく、その經驗事實がまづ説明さるべきものである。現實は黙して語らず、理論によつて語らしむるのみ。或は個々の現象は必ずしも本質的なものを示さず、それによつて直ちに理論の正否を判斷するわけにはゆかない。しかし現實の經濟は絶えず流動變化するが故に、理論は流動變化する經驗事實を説明し、時としてみづからを改訂することにより變化した現實を説明する。所謂實證主義は理論的研究を否定するものでなく、その一面であるにすぎない。

アダム・オミス以後の經濟學の理論的研究がマルサスの段階に於てその實證的一面を充實せんとしたことは、確かに一つの進歩であつたが、その實證はその當然の職能を發揮したであらうか。既に明かにした如く、マルサスはその價值論に於て價值を價格の需要供給關係の現象に解消した。價格は經驗的事實であるが、價值は理論的存在である。價值の理論によつて價格の經驗事實を説明すべきであつたのに、マルサスは理論的なる價值を経験的なる需要供給關係で説明した。これが彼の實證主義であつた。これにより彼は價值理論の意義を見失つた。し

かし彼はその所謂實證主義により變化する經驗事實の他の面を追求せんとした。それは經濟變動の事實である。もとより價値の理論的追求が經濟變動の問題解決を困難ならしめるわけではないが、マルサスに於ては價値論の失敗が、偶々經濟變動の研究に伸ばしめる機縁ともなつたのである。即ち經濟變動は所謂實證主義の最もよい對象であるからである。

經濟變動論は富の増進を促進する諸要因の研究に最もよく現はれた。ここでは變化法により他の諸要因を不變とした場合の一要因の變化が惹起す經濟變動が研究されてゐる。これはクラークやシュンペーター等によつて基礎づけられたる動態理論の先驅をなす。販路理論によつて説かれる均衡はその前提と考へられる。スミスの自然的自由の制度を出發點とするセイの販路理論は、リカアド、ジェムス・ミル等によつて踏襲され、古典經濟學の主軸となつたが、マルサスはスミスの衣鉢をつぐに拘らず、その強い現實感より過剩節約の理論により販路理論の調和的循環を破り、一般的過剩生産の現實を理論的に承認せんとした。

確かに一八一五年の恐慌以後の變動は從來の理論を根底から震かした。この恐慌の弊害は英國のオーウエンやフランスのシスモンデイをして資本主義經濟の矛盾を非難せしめるに至つた。マルサスの『經濟學原理』は販路理論に對する駁論を展開し、その最後にこの原理を一八一五年以後の勞働者階級の困難に應用して論じた。リカアドですら一八二二年出版の『經濟原論』第三版には新たに一章を加へ、資本主義社會に於ては機械の採用が必ずしも勞働者階級に利益を齎らざることを認めるに至つた。¹⁾ 現實の變化は理論の改訂を促し、所謂實證主義はこの傾向を積極的に強めるが、さりとて新しい理論の形成は容易ではなかつた。英國經濟學はしばし實踐問題の解決に迫られ、理論の再建には手がとどかなかつた。

しかしこの理論的問題は英國經濟學に於て解消したわけではなく、その解決は今世紀に入り、第一次世界大戰以後に持ち越された。第一次大戰以後の一般的恐慌は洵に一世紀前のナポレオン戰爭後の恐慌を髣髴せしめるものがあつた。ここでも嘗てと同じく過剰生産、それに伴ふ失業、古典經濟學の調和論の批判が考察されざるを得なかつた。そしてここにマルサス的役割を演じたのはケインズである。彼も元來古典經濟學の繼承者であつたが、戦後の雇傭問題の解決を契機として古典經濟學の調和論に反對するに至つた。それは供給よりも需要或は消費に重點を置くことによつて解かんとしたことは又マルサスと同様である。

セイヤリカアアの古典經濟學では供給はそれ自らの需要を創造する。従つて消費を節約する個人の行動は必然的にその結果消費に供せられることから解放されるに至つた勞働と商品とを、資本としての富の生産へ投下せしめる。この見解はジョン・スチュアート・ミルも踏襲したところである。マーシャル、エツチウオース、ピグウ等もこの見解を素朴な形態に於て述べてはゐないが、これを基礎理論としてゐる。

しかしケインズによれば雇傭量を決定する社會全體の有效需要は消費のために支出される需要と投資のために支出される需要とから成り、前者の増減は必ずしも後者の反對の増減によつて相殺補充されない。消費需要額を左右するものは、消費性向であり、投資需要を決定するものは資本の限界能率と利子率の關係である。従つて雇傭を大ならしめるには、この三つの要因を誘導しなければならぬ。一國の富がかなり急速に増大しつつある場合、自由放任の状態のもとに於てはこの恵まれた状態の一層の發展が新投資誘因の不十分なために中絶しがちである。社會的並に政治的環境と消費性向を規定する國民的特徴を一定とすれば、發展的國家の福祉はかかる誘因が十分であるか否かに依存する。かかる誘因は國內投資又は對外投資の何れかに見出されるものであつて、それ

らが相携へて總投資を決定する。總投資量が利潤動機のみによつて決定される状態のもとに於ては、國內投資の機會は結局國內利子率によつて支配され、他方對外投資量は必然的に順なる貿易差額の大きさによつて決定される。かくて國家の保護のもとに行はれる直接投資の問題の存しない社會に於ては、政府の當然専念すべき經濟的目的は國內の利子率と貿易差額であると考へられた。しかしこれこそ正に古典經濟學に先行したマーカントイリズムの注目したところであり、ケインズがみづからの先驅としてマーカントイリストを高く評價する所以である。

マーカントイリストの低金利論はケインズの特に尊重したところである。それでは利子率は社會的利益に最も適した水準におのづから調整するものではなく、絶えず不當に高くなる傾向にあり、従つて賢明なる政府は法律と習慣とにより且つ道德律の掟を破つてさへもそれを壓へようとするといふのである。これは古典經濟學から云へば異端の邪説であるが、ケインズによればこれこそ自然的調和を否定する正しき思想である。

失業の弊害となつて現はれる消費性向の不十分さ、即ち過少消費を斥ける見解もマーカントイリズムに見られるとケインズは説く。即ち放蕩は人間にとつて有害な不徳行爲であるが、商業にとつてはさうではない、とパーボン⁴⁾は説いたが、この見解はマンデヴィルの『蜜蜂物語』によつて一般化されたといふ。

従つて十九世紀のマルサスの過少消費説がこの一連の思想としてケインズの注意を惹いたのは當然である。ケインズは現代に於けるこの思想の直接の先驅として一八八九年に發表されたるホブソン (J. A. Hobson) とマムマーリー (A. F. Munnery) による共著『産業の生理學』を擧げるが、これは結局古典經濟學の華かなりし時代の代表者マルサスの復活に外ならない。ケインズはリカアド的な古典經濟學に對抗してマルサス的な新教徒に改宗し

た。彼の研究『雇傭、利子及び貨幣の一般理論』はその宣言書である。この書物の邦譯への序文に於ても、彼はリカアドよりもマルサスが大なる現代的意義を有することを指摘した。ケインズはそのマルサス論に於て、販路理論を斥け過少消費説を強調したるリカアド宛のマルサスの手紙を掲げ、そしてこの通信を熟讀するものはマルサスの到達點の殆ど全面的の抹殺と百年にも互るリカアド理論の完全なる支配が經濟學の進歩にとり災難であつたといふ感なきを得ないと云ひ、又リカアドの代りにマルサスのみが十九世紀經濟學の出發したる根幹であつたならば、世界は今日遙かにより賢明で且つ豊かなところとなつてゐたらうにとの感慨を述べてゐる。しかしリカアド對マルサスの問題が百年後の今日、ビグウ對ケインズの問題として十分に解けたかどうかは、改めて立入つて研究しなければならぬが、ケインズ經濟學の重點、役割を吾々はここに明確に把握しなければならぬ。即ちそれは表面上は戦後の失業問題解決を動機として現はれたが、その眞の努力は古典經濟學が百餘年間墨守する販路理論を破碎する理論の建設に外ならない。今更らながら經濟學の進歩の遅々たるを感ぜしめられる次第である。

(1) cf. R. Luxemburg, Die Akkumulation des Kapitals, 1912, S. 121 ff.

(2) J. M. Keynes, The General theory of Employment, Interest and Money, 1936, pp. 18—19, 鹽野谷九十九譯『雇傭、利子及び貨幣の一般理論』二三—二五頁。

(3) J. M. Keynes, op. cit. p. 335, 鹽野谷譯『四〇—四〇一頁。』

(4) J. M. Keynes, op. cit. p. 351, p. 358, et seq. 鹽野谷譯『四二一頁四二九頁以下。』

(5) J. M. Keynes, Essays in Biography, 1933, pp. 140—141, p. 144.